武蔵野日曜聖書講筵

人の創造

――創世記第1章14～27節、2章7、23節――

１９９０年２月14日
小池辰雄

祈り「1月2日　人の創造」神は人をおのが相に創造した　本質と現象が一つ　科学と宗教の真理は次元がちがう　キリストは神の現象体　根源現実と相対現実　自分を霊界に投げ入れる　自然・霊然・神然　わが主なる実存者　天地融合が人間　わが骨の骨わが肉の肉　創造の原因も目的も神の愛　一切の愛は神から　絶対次元を持つと相対次元の本当の生き方ができるわが十字架によって贖われたる者よ　本願体現

【創世記1】

24神言給けるは地は生物を其類に従いて出し家畜と昆虫と地の獣を　其類に従て出すべしと。即ち斯なりぬ。25神地の獣を其類に従て造り家畜を其類に従て造り地の諸の昆虫を其類に従て造り給えり。神之を善と観給えり。26神言給けるは我儕に象て我儕の像の如くに我儕人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍う所の諸の昆虫を治めんと。27神其像の如くに人を創造たまえり。即ち神の像の如くに之を創造、之を男と女に創造たまえり。28神彼等を祝し神彼等に言たまいけるは、生めよ繁殖よ地に満盈よ之を服従せよ又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ。29神言たまいけるは視よ我全地の面にある実蕨のなる諸の草蔬と核ある木果の結る諸の樹とを汝等に与う。これは汝らの糧となるべし。30又地の諸の獣と天空の諸の鳥および地に匍う所の諸の物等凡そ生命ある者には我食物として諸の青き草を与うと。即ち斯なりぬ。31神其造りたる諸の物を視たまいけるに甚だ善かりき。夕あり朝ありき是六日なり。

【創世記2】

1斯天地および其衆群悉く成りぬ。2第七日に神其造りたる工を竣たまえり。即ち其造りたる工を竣て七日に安息たまえり。3神七日を祝して之を神聖めたまえり。其は神其創造為したまえる工を尽く竣て是日に安息みいたればなり。

4エホバ神地と天を造りたまえる日に天地の創造られたる其由来は是なり。5野の諸の灌木は未だ地にあらず野の諸の草蔬は未生ぜざりき。其はエホバ神雨を地に降せたまわず亦土地を耕す人なかりければなり。6霧地より上り

て土地の面を遍く潤したり。7エホバ神土の塵を以て人を造り生気を其鼻に吹入れたまえり。人即ち生霊となりぬ。……15エホバ神其人をとりて彼をエデンの園に置き之を理め之を守らしめ給えり。16エホバ神其人に命じて言いたまいけるは園の各種の樹の果は汝意のままに食うことを得17然ど善悪を知るの樹は汝その果を食うべからず。汝之を食う日には必ず死ぬべければなり。

18エホバ神言たまいけるは人独なるは善からず我彼に適う助者を彼のために造らんと。19エホバ神土を以て野の諸の獣と天空の諸の鳥を造りたまいてアダムの之を何と名くるかを見んとて之を彼の所に率いいたりたまえり。アダムが生物に名けたる所は皆其名となりぬ。20アダム諸の家畜と天空の鳥と野の諸の獣に名を与えたり。然どアダムには之に適う助者みえざりき。21是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時其肋骨の一を取り肉をもて其処を填塞たまえり。22エホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に携きたりたまえり。23アダム言いけるは此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ。此は男より取りたる者なれば之を女と名くべしと。24是故に人は其父母を離れて其妻に好合い二人一体となるべし。25アダムと其妻は二人倶に裸体にして愧ざりき。

【詩篇82】

1かみは神のつどいの中にたちたもう。神はもろもろの神のなかに審判をなしたもう。……6我いえらく、なんじらは神なり。なんじらはみな至上者の子なりと。

●祈り

祈ります。天地および人類を創造したまいし真のおん神さま。この年の始めから、創世記からまた学んでおりますが、今日は人の創造のことを承りたく存じます。風邪のために多くの兄弟姉妹が今日は休んで、まことに人数は少なくありますが、どうぞ、彼等がそれぞれの所において聖書を開き、聖書から直ちに力を得ることができますように願い奉ります。この集会にも珍しい方も来られ、うれしく存じます。どうぞ始めから終わりまであなたご自身の御言と御霊をもって導いてくださいますようにお願いいたします。

簡単でありますが、心からの感謝と祈りと賛美をもって御名にあって捧げ奉る。アーメン！

●「1月2日　人の創造」

小池辰雄著作集第十巻『聖書は大ドラマである』の「1月2日　人の創造」の項。

「神は人をおのが相に創造した。……男性と女性に神は彼らを創造した。（創世記１・27）

混沌たる宇宙に神の霊気が漂うていたが、神は先づ光を創造し、天には日月星辰を配し、地には諸々の植物、爬虫類獣類、海には魚類、空には昆虫類鳥類を創造した。そして最終段階に人類の創造にとりかかった。これが第一章の創造譚であるが、この第一章第二七節は神秘な人間の本質を告げるもので、この一句を全存在を以て信受する人は本当の幸福を知るにちがいない。知るとは全存在で体感体認することを謂う。

神が神の相に即して人を創造したという。神は無相の相である。人間の側からは端倪するべくもない。霊的な実在を偶像化してはならない。その無相の相に即して創造された人間は神性を宿した。だから人は神の現象体である。本来極めて神秘的存在なのである。日本の古代人も人を霊止、神霊の止まる存在と解した。仏教でも衆生悉く仏性ありと称う。であるから魂がある限り、人は宗教界に属している。万人は宗教人である。男性も女性も神性を宿している。神の「似姿」という訳はおもわしくない。

さてまた二章七節の神話的表現によると、「実存主（エホバ）神は大地（アダマー）の土で人（アダム）を形成してその鼻に生命の気息を吹き入れた、すると、人は生気魂となった」とある。即ち人は天的な霊気と地的な要素から成る天地融合の霊肉渾然たる霊幸う生命体！　豊かな人間性よ！」

創世記1章24節から。天地万物を創造したことがここに書いてあるんですが、最後の創造が人間であるわけです。それが1章27節。この第1章というのは、いわゆる「プリスターコーデックス」「祭司典」という史料がある。紀元前5世紀頃の文献です。第2章はそれよりずっと古い。史料的にいいますとね。そういった学問上のことはいいですけれども。今、本論に入る前に、天地創造の神話というものは各民族がいろいろ持っています。日本にも神話があります。ギリシヤにもあるし。特に聖書の神話はアッシリヤ、バビロニア、あちらの方面の神話と類似しているところがかなりあるわけです。神話の形をもっていかなる真理が語られているかということを見ていかなければならないわけで、神話そのものに興味をもつ必要はなにもない。おとぎ話みたいなものですから。他の民族の神話のことなんかを言いだすときりがないから、やめておきますけれども、日本の神話もなかなか面白いですよね。

●神は人をおのが相に創造した

ただここでもって、創世記1章26節に、

26 **神言給けるは我儕に象て我儕の像の如くに我儕人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍う所の諸の昆虫を治めんと。**

ここのところは、神は「われら」といって複数になっている。こういうところが、いか

に他の神話と類似であるかということが、こんな所にも出ている。大体「神」「エロヒーム」という字が複数の形なんです。「エール」というと単数ですけれども。「エロヒーム」とは文字通り直訳すると「神々」という字です。それを単数で取り扱う。もちろん、文献においてもそのつもりなんですけれども。しかし、形が複数なので、「我らの如く」と訳す。これを新約の神学からいって、「我らというのは三位一体の神の我らである」なんて、そんな言い方を別にする必要はない。神あるいは神の天使たちをひっくるめて我らという、そういう神話になっているかもしれない。

とにかく、

「神の形の如くに人を造った」

という。この「の如くに」がちょっと困る。ヘブライ語の「ヴェ」という前置詞は「如くに」ではない。我々の姿に即してということ。「如く」というと、「似たようなもの」という意味だが、むしろ、形に即して、形通りにということ。

「我々の形通りに人を造ろう」

と。だから、私は

「神は人をおのが相に創造した」

と訳したというわけです。「如く」ではない。

「おのが相に即して人を創造し……男性と女性に神は彼らを創造した。」

ということ。この場合の「つくる」という字は正に「創造する」という「バーラー」という字です。

「ひと」というのは本来――日本の『大言海』という辞典を見ても――「霊が止まる」と書く。

「霊止」

です。神霊が、神の霊が止まっているのが本当の「ひと」という。だから、本来、我々は神の姿につくられている。「神の姿」といっても、偶像ではないですから、神は相がない。霊的な存在です。神さまは「無相」なんだ。こっちからはわからない。この無相の相の、この相が即ち人間なんだ。

「人間は神の無相に即して造られた」

ということ。具体的に現れた、現象したらば、それは人であると。

●本質と現象が一つ

太陽の光は見えない。太陽の光が花を造った。即ち、花は太陽の光の姿なんだ。現象において本質が現れている。本質と現象が一つである世界が本当の世界なんです。もう人間の世界はそれがみんなズレている。

これが一如ということ。だから、

「我々は神の似姿である」

という言い方をよくするけれども、「似姿」「イミテーション」ではないんだ。神の相（すがた）に即して造られた。仏教では、

「衆生悉有仏性（しゅじょうことごとくぶっしょう）あり」

と言うね。誰でもが「仏性」を持っている。我々は、それは神性なんだ。本来、神性である。これは自然科学的に言ったら、人類学では

「サルが段々進化して人間になった」

なんて言っているわけだ。それは、自然科学的な真理は、真理でいいでしょう。けれども、人間の魂の世界の本質、それから、それと相即しているところの魂と肉体、これは「霊肉渾然（こんぜん）」たるものですから。本来は霊肉渾然たるものです。それが、無相の相。我々は本来、神と――ドイツ語で「エーベンビルト・ゴッテス」（神と同じ姿）という。あれはいい言葉だ。「エーベン」というのは「正に同じ」ということ――「同じ姿」なんです。ゲーテがこの言葉が非常に好きです。神の相、正にその相であると。

即ち仏教でいうと、禅宗は、いろいろな迷いから悟りすまして、ひとは本来は仏であるという。仏の像も何も要らん。自分が仏だと。

「即身成仏」

という。空海がそうだ。この身そのまま仏と成る。本来、即身成仏的なものだと。聖書がそうなんです。

「即身成神」

です。こういう大前提からズレてしまった。それが「楽園喪失」ということ。「パラダイス・ロスト」になる。本来、パラダイスなんです。人間そのものがパラダイスの権化なんだ。これはもはや神話ではない。神話的表現を持っているところの根源の真理の世界がそうである。これは上からの、霊界からの神の言として、業として来たわけだ。

●科学と宗教の真理は次元がちがう

自然科学的な真理は、それはそれでいいですよ。けれども、この宗教の世界の真理は次元が異（ちが）う。そのことと自然科学的な真理とを何か辻褄を合わせようとするから、おかしなことになる。

「それでは、どっちが本当か、どっちがウソか」

なんて、そうではない。どっちも本当なんだ。どっちも本当だけれども、次元がちがう。それだけの幅をもった魂にならなければダメですよ。もう、宗教となると、他のことはみんなウソだと思ってみたり。科学となると、宗教の世界は、

「宗教は阿片なり」

なんてマルクスが言いやがった。レーニンの銅像の前には「宗教は阿片なり」という文句が書いてあるそうだ。

ドストエフスキーは、初め彼も社会主義的な無神論的な境地にいたが、あれがシベリヤに流されて10年間、民衆と会って、民衆にある非常に素朴な信仰に彼はうたれた。それでドストエフスキーは変わってしまった。彼の言葉に、

「ロシア人は無神であると言うならば、それは本当のロシア人ではない。本当のロシア人は神を信ずる。その姿が本当のロシア人だ」

と。民衆の姿を見て、そういうことになってしまった。ドストエフスキーの文学が凄くなるのは、流されてからのはなしだ。

だから、日本は今こそ、経済大国から宗教大国に変わらなくてはならないんだよな。経済が悪いわけではないけれども。

けれども、民衆はなかなか本当の意味で――素朴な信仰のひともありますけれども――かえって今度は難しくしてしまって、信仰ではなくて、いわゆる神学になってしまった。

●キリストは神の現象体

「神の相に即してひとを造った」

ということ。そのことを、

「みんなは神々だよ」

と言ったのは誰ですか。キリストですよ。私は『エン・クリスト』誌の26号（１９８６年４月春季号「汝らは神々なり」）に書いたでしょ。詩篇82篇を開いてください。

「[1]**かみは神のつどいの中にたちたもう。神はもろもろの神のなかに審判（さばき）をなしたもう。……[6]我いえらく、なんじらは神なり。なんじらはみな至上者（いとたかきもの）の子なりと。」（詩篇82・1…6）**

大事なのはこの詩篇82篇6節なんです。

「お前たちは神だぞ」

と。これは原語で言うと「神々」という言い方です。

「至上者の子、神の子だと旧約の詩篇にあるではないか」

と。

「お前は自分を神の子だなんて、とんでもないことを言う」

と、ユダヤ教徒にキリストがやっつけられようとした時に、

「冗談じゃない、お前たちは詩篇をよく読んだか」

というわけで、82篇のこの言葉をキリストがもってきて言われたわけです。そして、キリストは、

「神と我は一つなり」（ヨハネ10・30）

と言われた。全く一つだと。だからキリストは、

「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ14・9）

「私を見た者は神さまを見たんだ」

と。キリストは神さまの現象体だ。我々はキリストの現象体というわけだ。まことに不完全ですけれども。本質はキリストの現象体ということがはっきり言えなくてはいかん。キリストに救われたんだからね。

●根源現実と相対現実

神の相としてのそういう根源の現実は、実は失ってしまった。ということは、我々の「自我」という罪、「我執」という罪でズレてしまったから。相対的人間小池はひとつも神ではない、罪びとにすぎない。けれども、その奥においてはキリストが私を、あなた方一人ひとりを贖ったから、神的な存在とされている。それが信仰の現実です。信仰の現実においては、我々は神の子であるわけです。

クリスチャンは、ただ「罪びと」とばかり言ってたってしょうがない。

「罪びとであると同時に、義人、神の子である」

という、矛盾構造になっている。矛盾構造だが、奥の根源の現実が――私はそれを

「根源現実」

と言っている――根源現実は神の子であるわけです。相対現実は罪びとです。しょうがない。天国と地獄がガタガタやっているんだ、人間というのは。天国ばっかりの人も、地獄ばっかりの人もないわけだ。よっぽど悪いやつでも、どこかに天国があるはずなんだ。

キリストの十字架の片一方にいたやつは徹底的に悪いね、あれは。サタンのとりこになっている。

「お前は神の子なら、俺たちを救ったらよかろう」

なんて。非常に傲慢なんだ。傲慢、高慢なのは、これはサタンの霊です。平伏しの霊ではないから。

「さんざん私は悪いことをしたんだが、あなたはなにも悪いことをしないのに十字架にかかっている。せめても、聖国にいらっしゃるときに私を覚えてください」

と、もう片一方の盗賊は平伏しているわけだ。

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と、キリストと一緒に最初にパラダイスに入ったのは片一方の盗賊だ。

サタンの手下になっているのは、神を神としない。どうして、サタンというやつができたかというのは、ミルトンの『パラダイス・ロスト』（失楽園）に非常に詳しく書いてある。もともとあれは素晴らしい天使だった。それが高慢になったから、サタンに変わった。もともと神さまはサタンを造ったわけではないんだから。

それが正直、人間界の現実でしょうが。権力者というのは大体、サタンの手下になって

いるのが多いわけだ。それが間違った政治をするものだから、戦争なんかを起こして多くの人を犠牲にしてしまう。そうかと思うと今度は、土地の暴利を貪って、どんどん土地の値段を上げてまって、日本はもう本当におかしなことになってしまった。市民が困ってしまう。相続税でみんな、税金でどうにもならなくなってしまう。そんなバカげた国はありはしない。

大地は神のものですから、これは神有なんだ。神有の次は国有だ。国のものだ。これを今度は私有にしてしまって、勝手なことをやっているのが日本の現状だ。土地は国有にしたらいい。国から借りればいい。とにかく、本当の宗教の世界をもたないと、人間界はもうどうにもならんですよ。

●自分を霊界に投げ入れる

このように、

「詩篇の82篇は『お前たちは神々ではないか』と言っている。だから、私が『神の子』と言って何が悪いか」

というわけで、ユダヤ教徒にキリストが反論したわけです。このキリストは、「神の子」をひとつも誇りはしませんよ。

「私は何もできません。何も言えません」

と。「善き先生」と言われたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。善きものは神の他にないではないか」

と。それが、私がキリストのことを、

「無者」

と言っているゆえんなんです。

「何ものでもない」

というのが本当の平伏しの魂です。この「何ものでもない」ということは、「無私」ということ、私が無いということだ。虚無ではないですよ。私心がない。ゼロだ。すると、これは無限大なんだ。だから、無限大の神さまがキリストの中に入ってきた。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と。無相の相が、これが正にキリストだ。神という無相がキリストという相に現れた。だから、「我を見し者は父を見しなり」という。我々は、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えるように、本来、根源の現実はそうなんです。

今は、私はもう恐いものはない。人間の相対的な

「立派だ立派でない、どこがどうだこうだ」

なんていうことはもう問題でなくなってしまった。もう、私は楽でしょうがない。楽で、

力が来てしょうがない。１９５０年に聖霊を受けてから、私は風邪をひかないものね、病気に罹らない。

「祈る」というのは祈り入ること、自分を霊界に投げ入れるんです。そうすると、力が来る、光が来る、生命が来る。この境地はもう、ありがたくてしょうがないですよ。私は黙って、

「主さま！」

と無言の叫びをすると、直ちにその世界に入るからね。ええ。こんな簡単なことはありはしない。「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」よりかもっと簡単だ。あれも素晴らしいんだ、南無妙法蓮華経も。日蓮が南無妙法蓮華経を称えれば、龍の口で斬ろうとすれば、斬ろうとする奴がぶっ倒れる。あれは本当ですよ。それだけの境地の坊さんがいるかというんだよな。キリスト教界も同じことだ。頭で理解しているような程度の信仰ではダメだ、

「全存在で受けとれ」

ということです。

だから、創世記の１章27節なんかを読むと、もうありがたくてしょうがない。

「神の相に即して造られている」

という。その通りです。ミケランジェロは神さまを何か、鬚のはえた白髪のお父さんみたく描いたけれども、あんなものは描かない方がよかったね。光だけでたくさんだ。無相なんだから。まぁ、芸術家だから、そう表したんでしょうけれども。あれもひとつの神話的表現だから。聖書には神話的表現がたくさんある。神さまの息だとか、手だとか、足だとか。けれども、偶像を造ったらおしまいだ。

それが創世記の１章の27節です。しかも、これを「男と女に造った」という。「創造」という字が三回出ている。

「無から有をつくる」

というようなことをよく言うね。けれども、単なる無ではない。神さまの生命がそこに現象してくるんだから、決して単なる無ではない。霊的必然の世界なんだ。

それで、ちょっと余計なことになるけれども、

28神彼等を祝し神彼等に言たまいけるは、生めよ繁殖(ふえ)よ地に満盈(みて)よ之を服従(したがわ)せよ

とある。そして、どんどん増えていった。もう今は、20世紀は、増え過ぎてしまって困っているわけだな。中国でも二人以上生んではいかんということになっている。

又海の魚と天空(そら)の鳥と地に動く所の諸(すべて)の生物(いきもの)を治めよ。

と。この「治めよ」は、神さまのように治めればいいよ。ところが、人間は我欲でもってやっている。治めているのではなくて、我欲が利用している。そうしたら、終いに自然を勝手に利用し、だんだん自然を害ねて、とうとう20世紀は、これはもうグローバルな地球

上の問題になってきた。酸素がおかしくなってきた。酸性の雨が降ってきた。

●自然・霊然・神然

天道、天の道に即しているか、ということが問題なんです。それを「道路」という。本当の道は道路という。太陽という光によって百花繚乱と咲く。どれもこれも本ものであるというわけだ。ユリの花がバラの花に「お前は花でない」なんて言えない。お互いさまに、

「ああ、結構でございます」

と、大調和をなす。各民族もそれぞれの風土で、考え方はそれぞれで結構だ。問題は、

「その元に本当の一つがあるか。万法帰一するところのものを持っているか」

ということ。あらゆる法が一に帰する。全部、法の世界ですから。自然界の法則、人間界の法則、霊界の法則。奇蹟なんてありはしない。霊界の法則が動いているだけのはなし。霊界の法則が一番高次な法則です。

カントの『実践理性批判』の終りの方に、

「星辰の空と、我がうちなる道徳の法、これを思えば思うほど、いよいよ自分は畏敬の念で満たされる」

という有名な言葉がある。カントはあそこで、自然法と道徳法を言ったけれども、宗教法、霊法の世界を彼はあそこでは言わなかった。でも、霊法の世界がもう一つある。

「**生命（いのち）の御霊（みたま）の法（のり）**」

とパウロがローマ書8章2節で言っている。生命の聖霊の法、法の世界です。

「法に従うことが本当の自由である」

と、これがマルチン・ルターの宗教改革だ。『クリスチャンの自由』というのがそうだ。本当の法に従うというのが自然法なんだ。

「断崖の松は素晴らしいなぁ」

というのは、あれは自然の法則に従って素晴らしい姿をしているわけだ。鳥は風に、気流に乗って自由に動く。あれは道なき道だ。無道の道という。

荘士の世界がそうだ。道なき道。「これが道でござる」なんて規定していない。無限の可能性をもっている。その時に即しながら動いている。どんな飛行機も鳥にはかなわない。燕の飛び方にはかなわない。あんなことをしたら、飛行機はひっくり返ってしまう。ところが、自然界はそれがある。私は人間でなければ鳥になりたい。無道の道が本当の「天然」だ。「天然り」ということ。

「天然自然はいいなぁ」

というね。

霊的な世界がある。宗教の世界で動いているのが「霊然」の世界。「霊然り」という。キリストばかりはもう一つ高い。「神然」の世界です。神然の世界で動いている。罪なきひと。

彼の言、彼の業はもの凄い。キリストはケタが違うですよ。お釈迦さんがいくら偉くたってダメですよ、キリストにはとてもかなわない。神然の世界を現す、死人まで甦らせるような力を持っているんだから。

本当に祈りの世界でそういう境地にだんだん入ってくださいよ、楽になるから。霊然の世界にだんだん入っていく。私は、なんのかんのと言われたって、そんなことは一向差し支えない。勝手にしやがれと。本ものが来ているから、人の毀誉褒貶なんか問題にしていません。霊然の世界です。だから、どうしても今度は、それを詩で表現しないではいられない。

●わが主なる実存者

今度は第2章にいくと、

7エホバ神　土の塵を以て人を造り生気（いのちのいき）を其鼻に吹入れたまえり。人即ち生霊（いけるもの）となりぬ。

とある。

「神」は「ヤーヴェー」という。「エホバ」というのは本来は、ヘブライ語で「ハーヤー」「存在する」という意味です。「ヤーヴェー」というのが神さまの本当の名前だという。ところが、ユダヤ人は、

「神さまの名をみだりにあげるべからず」

というので、経典を読むときにも、「ヤーヴェー」と読まないで、「アドナイ」（わが主）と読んだ。「アドナイ」の母音と「ヤーヴェー」の子音を混ぜると「エホバ」という発音になる。それで、「エホバ」という読み方に19世紀の終り頃までなっていたのを、

「これはちょっと間違えていた。もとはヤーヴェーと言った」

と。けれども、間違って「エホバ」と言った方がおもしろい。「存在するもの」と「わが主」というものが、「エホバ」という間違った言い方に、両方がちゃんとこもっている。だから、私はいつまでも「エホバ」という名前を使っている。「エホバ」で結構なんだ。

「わが主なる実存者」

ということ。「エホバ」を、

「実存主」

と私は訳している。そんなことを言うやつは他にいない。何しろ、私は例外者になってしまっているんだ、自然に。しょうがない。本当なんだから。

●天地融合が人間

7エホバ神　土の塵を以て人を造り生気（いのちのいき）を其鼻に吹入れたまえり。人即ち生霊（いけるもの）となりぬ。

これは全く神話的な表現です。

「**神さまが生気（いのちのいき）を吹き入れた**」

なんてね。けれども、この神話的な表現が非常におもしろいわけです。土でもって粘土細工みたいに人間を造ったという。というのは、

「地的な要素と、上から来た神さまの気、天的な要素と、天と地が一つになって融合しているような構造が人間だ」

というわけだ。「いけるもの」とは「生霊」と書いてある。生ける霊となった。「霊」と言っても、これは英語でいうと、「スピリット」（霊）でなくて、「ソウル」（魂）なんです。「リビング　ソウル」となったという。ルターは「レベンディゲ　ゼーレ」と訳している。この場合は「ガイスト」（霊）でなくて「ゼーレ」（魂）です。大事なのはむしろ本当は「ガイスト」です。「ガイスト」という言葉をただ「精神」とばかり訳している人があるけれども、ダメなんだ。これは「霊」なんだから。

「ガイスト・ゼーレ・ヘルツ」

「スピリッツ・ソウル・ハート」

「霊・魂・心」

ということ。ギリシア語でいうと、「プシヘー」（魂）だ。とにかく、この2章の方では、

「神さまの気が入っているところの生きものになった」

という言い方をしている。これは「ヤーベスト」といって、神さまのことを「ヤーヴェー」と言っている史料で、紀元前8世紀、9世紀の頃の史料なんです。第1章よりかずっと古い。お伽話みたいに持っている。

●わが骨の骨わが肉の肉

それから、いろいろな動物には雄雌がいて、そしてその名前をつけたと、おもしろいことが書いてある。

18 **エホバ神言いたまいけるは人独（ひとり）なるは善からず我彼に適（かな）う助者（たすけ）を彼のために造らんと。** 19 **エホバ神土を以て野の諸（すべて）の獣と天空（そら）の諸の鳥を造りたまいてアダムの之を何と名（なづ）くるかを見んとて之を彼の所に率（ひき）いいたりたまえり。アダムが生物（いきもの）に名（なづ）けたる所は皆其名となりぬ。** 20 **アダム諸（すべて）の家畜と天空の鳥と野の諸の獣に名を与えたり。然どアダムには之に適（かな）う助者（たすけ）みえざりき。**

即ち、男に対して女という相手をつくる。夫婦だね、夫婦関係。プラトンの哲学にいくと、

「本来人間は一つであった。それが二つに分かれた。だから、相愛することになった」

という。聖書も同じだよ。どこから連れてきたかと思うと、

「アダムの胸の、心臓のところの肋骨（あばらぼね）を取って女を造った」

なんていうとんでもないお話なんだけれども。ということは、本来一つのものが二つにな

ったから相慕わざるをえない、という不思議な構造になっているわけですね。

21是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時其肋骨の一を取り肉をもて其処を填塞たまえり。22エホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に携きたりたまえり。

しかも、「深い眠りに入らせた」と書いてある。私はあそこの所で、

「神さまは按手した」

という表現にしましたが。神さまの霊が彼の中に入ってきて、そして、眼が覚めた。「肋骨」という字はシュメール語で「チ」という。「チ」というのは「肋骨」であると同時に「生命」という意味があるそうだ。要するに、生命の一部分が取られて、そして、それを女性に造ったという。もちろん、神話的表現だが。しかし、自分の一部分から取られた。その後のアダムの言葉が凄いんだ。

23アダム言いけるは此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ。此は男より取りたる者なれば之を女と名くべしと。24是故に人は其父母を離れて其妻に好合い二人一体となるべし。25アダムと其妻は二人倶に裸体にして愧ざりき。

「わが骨の骨わが肉の肉」

という表現です。これは旧約の詩で一番古い詩です。これ以上の言葉はないくらいだね。「骨までしゃぶる」なんていう言葉があるけれども。要するに、

「お前と私は一つだ」

ということ。だから、

「父母を離れて一体となる」

なんて書いてある。

「此は男より取りたる者なれば之を女と名くべし」

とあるが、これは日本語ではわからない。ヘブライ語では「男」という字は「イーシュ」という。「女」は「イッシャー」という。「イーシュ」（男）から取ったから、女性語尾をつけて、「イッシャー」（女）という。それを「男から取ったから女と名づけた」という言葉なんです。それをルターはそのドイツ語を造ってしまった。ルターらしい。

「マン（男）から取ったから、メンニン（女）と名づける」

と訳した。

「おのこから取ったから、おみなと名付く」

なら大分いいよ。日本語だってできるわけだ。お互いに、

「わが骨の骨、わが肉の肉」

というわけで、だから、夫婦一体とか、一如とか言う。まぁ、それはアダム・イブの物語のときは簡単だけれども、今は普通の現実では、一人の男と一人の女は、いろいろな今までの系譜や環境や何やかんや、いろいろなものが違うわけだ。それが一緒になってやって

いこうというんだから、お互いに忍んだり、お互いに荷ったりしないというと、成り立たないわけだ。

けれども、神さまの創造の最後は女性であった。だから、創造の最高の傑作は女性のあるがままの姿だと、私は大胆に讃美歌に作ってしまったけれども。芸術の世界でも、女性のそのままの姿をヨーロッパではよく描いてきたでしょ。日本でも、始めはなかったけれども。

要するに、男は男らしく、女は女らしく。らしくあるということが大事です。それらしくしくあるということ。男女同権なんていうことは、それは社会的な意味においてはそうでしょうけれども、本質的にはどこまでも、男は男らしく、女は女らしくなければダメですよ。それで本当の優美とまた荘厳さがあるわけだ。

●創造の原因も目的も神の愛

だから、神さまの創造の秩序というものは素晴らしいものです。神話で表現されているところの内容が素晴らしい。それがどんなことになってまったかというと、その次のサタンの誘惑でもって、エバが禁断の果を食べてしまって、どうのこうのと。これがまた神話であると同時に、人間の現実なんだからしょうがない。

そこのところを中心にして、ミルトンという詩人は大変なもんだね。自分は盲だよ、それであの十二巻の膨大な詩『パラダイス・ロスト』（失楽園）を書いてしまった。娘さんが三人いて、それに口授して筆記させた。大変なひとです。ミルトンは大学を卒業してから５年間、聖書はもちろんのこと、ギリシア、ラテンの古典をしっかり勉強した。それから、彼の内容が抱負になった。クロムウェルの共和政府のときに、政治にもだいぶ携わってもいたけれども、眼が見えなくなってから、最後の仕事として詩にとりかかったわけだ。『パラダイス・ロスト』の他にいくつも書いています。本来、詩人的です。眼が見えなくなってからの一番有名な詩は『サムソン・アゴニステス』（闘士サムソン）です。深刻な句が随分あります。私は訳しかかっていたら、他の訳が岩波から出てしまったから、止めてしまったけれども。

なぜ、神さまはその創造をなさったかというと、これは創造の原因も結果も目的も全部、愛です。人間の一番大事な、一番求めているものは実は愛なんです。孔子や孟子に言わせると、仁です。お釈迦さんの世界なら、慈悲だ。結局みな同じようなものだ。愛のないところには生命はない。本当の生命の本質は愛なんです。

「永遠の生命」というのは時間的ではない。質的なはなしだ。愛をもっているところの、

「神さまの愛を宿している生命」

が「永遠の生命」です。私たちは神の愛によって創造されているんだからね。その神の愛がぬけてしまったら、もう生命は生命でなくなる。何年生きたってダメなんだ、そんなのは。

また、どんな短命であってもいいんだ、天的に生きていれば。地上の生命の、生涯の長短ではなくて、問題はいつも質なんです。

「**一日は千年の如く、千年は一日のごとし**」

と、ペテロが言いました。神を抜きにしたら、一切が「空（くう）」になってしまう。

「**空の空なるかな、すべて空なり**」

と、伝道の書に書いてある。人間的な元気なんてものは、若い時には大いによさそうだけれども、だんだんこれが放物線を描いて落ちてしまう。歳を取るとダメになる。ところが、逆カーブがある。神さまの愛の生命をいただいていると、上昇カーブになる。ありがたくてしょうがない。

●一切の愛は神から

だから、言っているでしょ、

「聖書は、分かるの分からないのではない。聖書は教えではない。これはドラマだから、聖書の現実の中に自分を投げ入れろ。サマリヤの女とキリストが会話していたら、自分がサマリヤの女になれ」

と。ヨハネ伝3章、4章のところだ。あれは素晴らしいところです。あそこにも福音がある。ルカ伝15章の放蕩息子のところも。

愛は、それが「エロース」であろうと、「フィロース」であろうと、「アガペー」であろうと、全部神さまから来ている。我々がいただいている感性でも、理性でも、悟性でも、霊性でも、全部これは神さまから来ているんだからね。悪いものは一つもない。いわゆる禁欲ではない。

「それがどのような角度で、どのような質で動いているか」

だけが問題なんです。キリストは結婚を祝福した。彼は結婚しないけれども。キリストというのは非常に気持の豊かなかたです。そんなところは禅宗の坊さんとだいぶ違う。

「我々に与えられているものはみな善からざるはなし」

なんだ。食べ物も全部いい。どれもこれも食べていい。

「これは食べてはいけない。これは食べては悪い」

なんて、そんなことはありはしない。ただ問題は、

「どのような意識において、どのような限度において、自然法に従っているか、霊法に従っているか」

それだけのはなしです。どうせ、人間の相対的現実は矛盾だらけです。しかし、

「その矛盾の奥の、本当の調和の世界をちゃんとわきまえて生きているか」

と。ゲーテは、

「一切の愛は神さまから来ている」

と言った。さすがはゲーテは、いわゆるキリスト教神学者みたいに愛の区分なんかやって

やしない。もっと大きいんだ。

「神―大自然―我」

が融合している世界です。そういうでっかい、

「無即無限無量」

のような境地を持ちえないのは、この世界を持たないからなんです。

漱石さんは素晴らしいけれども、なお惜しい。

「則天去私」

というのは素晴らしい言葉ですよ。これは大真理です。漱石さんの終りの頃の手紙に書いてある。

「自分はとうとうそこまで行かなかった」

と。彼は苦しんでいるんだ。ところが、「則天去私」は、キリストが我々に無条件に与えている世界なんです。躓いても転んでも、本当の現実はこれをいただいているから、進んで行ける。

●絶対次元を持つと相対次元の本当の生き方ができる

エゴイズムの、自我主義の首魁はサタンです。だから、人間が欲で動いているときには、みんなサタンの手下になっているということ。世界は大いに、政治家も国もその下になって、軍備を拡張してしまって、とうとう、ソ連もアメリカもやりきれなくなって、

「もうよそう、よそう」

と、だんだん少しよくなった。もう第３次戦争がきたら、世界はお終いだ。ところが、第３次戦争でなくても、我欲は、あいかわらず人間はあるものだから、それがまた自然を害したり、ゴタゴタやっていると終いには、

「もうお終いだぞ。21世紀は果たして無事に終わるか」

というようなわけだ。ちょっともおめでたくはないんだ、本当は。本当におめでたくなるなら、「神に帰れ」ということ。「悔い改め」というのは「帰れ」ということですから。悔いて改めることではない。「立ち帰れ」という字です。

「神に帰れ、キリストに帰れ、如来に帰れ」

ということです。

そうすると、その世界から、もう何でも、知恵も力も出てくる。宗教は文化文明と違う世界ではない。ただ、次元が違うから。

「本当の次元の絶対次元の世界を持つと、相対次元に対して本当の生き方ができるぞ」

ということだ。それが分かってくれないから、困るんだ。

相対的に言って、女のかたの方が信仰の世界に入りやすい。男みたいに理屈っぽくない

から。理屈っぽい人は、頭が先にたつ人はなかなか入れない。頑固なやつはなかなか入れない。

ところが、頑固がひっくり返されると、また凄いことになる。パウロがそうだ。パウロというのは頑固なやつだった。キリストを信ずる者を迫害して、ステパノを石で殺すのも良しとした。しかし、

「彼らを赦せ」

というステパノの祈りは、パウロにはひびいたね。ダマスコ途上でキリストからひっくり返された。あんな鮮やかなひっくり返りはない。

私も阿蘇の山の中で聖霊を受けたからね。本当にあれが決定的な転換なんです。聖書の読み方が変わってきた。ベールが取れた。

「なるほど聖書は、分かるの分からないのというものではない。『参りました！』と降参しなければ、この世界には入れない」

と。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書のキリストにぶつかって、キリストの前に本当に降参したら、入れる。降参するまでは、

「こんなことがあるんでしょうか？」

なんてやっているうちは、いつまでたってもダメです、キリストに降参しない限りは。降参すると、今度は逆に凄いことになる。ええ、ありがたいね。だから、

「聖書の研究ではありませんよ。ギリシア語やヘブライ語がよく分かれば、よりよく聖書がわかるなんて、そんなものではない」

と。そんなことをはっきり言うものだから、僕は憎まれる。どうも、困ったもんだ。けれども、本当のところは、私の主観では絶対にないですから、私の話を身体で聞いている人には響くんです。

伝道というのは正に、そういう直接的な響きの世界です。音楽みたいなもの。意味の世界ではない。ザビエルが日本人にポルトガル語をしゃべったって、それは分かりはしない。分かりはしないけれども、ザビエルの言葉の響きに参ってしまう。だから、あの時、随分たくさんのクリスチャンができた。そういうもんですよ。

皆さんも、一人ひとりがそのようにして、どうぞ、

「一対一の伝道をせざるを得ない」

といって、やってください。

「我れ語らざるを得ない。告白せざるを得ない」

と言って。これは教えではない。告白なんです。

●わが十字架によって贖われたる者よ

「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」（マタイ5・3）

とは有名な、キリストの最初の言だ。これが私は身についたら、あとのキリストの言がスーッとわかってしまった。キリストは教えているのではない。彼の自分の体験を語っているだけなんだ。

キリストは霊が貧しい。あの「心」というのは「霊」という字ですから。「霊が貧しい」とは、自分を何ものともしないということ。一切は神から来ている。自分は何ものでもない。そういうことです。

「善き先生、**永遠の生命を受けるためには何をしたらいいですか**」

と、キリストに青年が聞いた。

「**なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか**」（マルコ10・18）

と。こういうキリストの言に私は本当に参ったわけだ。「善き先生」中の「善き先生」なんだ、キリストは。けれども、そんなことはひとつも思っていない。ゼロなんだ。神さまの前に全く平伏（ひれふ）している。そうしたら――「天国」というのは神さまの支配するところ、神さまの聖意の行われるところ――

「それが私の中に入ってきた」

というのがキリストの告白なんだ、あれは。私は、真似（まね）（「イミタチオ・クリスティ」「キリストに倣いて」）はできない。イミテーションはできない。イミテーションしたってしょうがない。

「さいわいなるかな、汝、わが十字架によって贖われたる者よ」

と。私の過去も現在も未来も全部、この十字架でもって自我がすっとんでいる。根源現実では、私の自我はありません。絶対恩寵の世界ですから。

「天国は――即ち聖霊の我は――汝のうちにあり」

と響いてきた。それでもう、あの聖言がもの凄い恩寵の言になった。

キリストが「すべし、すべからず」なんて言ったって、あれは全部、

「私がさせてやるよ」

ということなんですよ。その角度から読んでいかなければダメです。それでなければ、また新しい道徳になってしまう。いわゆる「宗教道徳」になってしまう。宗教道徳ということは大事なことなんだけれども、宗教道徳を自分でやろうとしたって、そんなことはくたびれてしまってダメだ。

「キリストを受けとれ、そうすれば宗教道徳は成っていくから」

ということ。

だから、十字架で過去も現在も未来も全部、私は贖いとられてしまった。そこに臨んでくるのは、この聖霊なんです。神の霊、キリストの霊なんです。それが生命になる。これは生命の霊であり、愛の霊であり、光の霊である。何とでも言っていい。この聖霊の内容

はもの凄く豊かなものです。

「聖霊」

というと、「聖い（きよ）」という言葉をつかものだから、

「それでは、聖くなければいかんのか」

と、すぐそう思うんだよな。そんなことをしたら、くたびれてしまう。誰が本当に聖くなれるか。そんな相対的な「聖い」ではない。『無門関』に書いてある。

「廓然無聖（かくねんむしょう）　枯木竜吟（こぼくりゅうぎん）」

という。仏教には素晴らしい言葉があるから、私はどんどん使う。「廓然」とは広大無辺なこと。

「神さまの世界は、本当の如来の世界は、広大無辺で、聖も聖でないも、善も悪も、そんな相対的な概念で判断できるような世界ではないぞ」

という。枯れたと思ったところが、これが実は竜のごとく響いている。それ自身は何も響きを持たない。ところが、風が吹くと響く。天来の風が吹くと響く。

●本願体現

私は汽車に乗ると、よくお隣の人に話をする。みんなしかめっつら顔をしているから、チョコレートを持っていたら、チョコレートをあけて、「お上がりなさいよ」なんていうわけで。それから、話しかかる。

「あなたは、何がご趣味ですか」

「尺八を吹きます」

「はぁ、そうですか。尺八の奥義はどんなところにあるんですか」

「自分で吹こうとしたらダメです。風が中に入って、自ずから発してもらうようにする。その境地が大事なんです」

「あぁ、そうでしょう。それは本当でしょう」

と私は言った。それがこれなんです。上からのもの。

バッハの音楽がそれなんです。天来の響きです。だから、バッハは自分のカンタータをいつも紙屑かごの中に棄ててしまって、別に惜しくもない。毎回、上（天）から与えられてやっているものだから。奥さんがそれを拾って、それでバッハのカンタータが残ったんだよ。ベートーヴェンはどちらかというと、彼の音楽を聞いていると、下（自分）からのもの凄い意志的な角度が強い。一番終りの「クヴァルテット」（弦楽四重奏）というのは、あれは天的な世界に入ったんだけれども。ベートーヴェンそれ自身も、もちろん素晴らしいけれども、どちらかというと、彼は下からの角度です。バッハは上からの角度です。

宗教の本当の世界はこの（上からの）角度です。親鸞の『歎異抄』が素晴らしいのはこの角度です。

「弥陀の御もよおしによって、弥陀の本願の劫力によって」

という。超一流の坊さんたちは素晴らしいですよ、正直。ああいう伝記なんかを読んでいる方が、聖書の註解書なんかを読むよりよっぽどいいわ。ただ、私の第十巻（『聖書は大ドラマである』１９８８年刊）は大事な本だから、あなた方はそれを本当に読んでくださいよ。祈り心でね。私は自分で読みながら、力がくるんだから。それから、他の人たちにも薦めてください、

「どうぞ、これを読みなさい」

と。なにしろ、まだ、私も使命があるから、簡単に死ぬわけにはいかん。それは死ぬわけにはいかない。ある課題をやっつけてしまうまではね。それは上からやって来ているので、何も私のいわゆるアンビションではない。

「ボーイズ　ビー　アンビシャス」（青年よ、大志をもて）

と言うね。「ガールズ」でもいいよ。

「イン　クライスト」（キリストに在って）

と、それを言ったか、言わないかは知らないけれども、これが本当のクラークさんの気持なんだ。

「キリストにあってアンビションを持て」

と。その「アンビション」（抱負）は全部、神のためであり、神に在ってだと。人間の願いなんていうものは高が知れていて、ヘタすると自己中心になる。仏教の言う「本願」です。

「本願を成就していけ、本願を体現せよ」

ということ。本願体現。この角度なら、どんなことをしても大丈夫です。

札幌農学校ではいろいろ校則がある。クラーク先生は、

「そんな校則は一つも要らん。『ビー　ジェントルマン』（紳士であれ）の一語でよい」

と。素晴らしいね。そういう世界です。西郷南洲は、

「敬天愛人」

と言った。私は、教育の方針はあれを大前提としてやった。南洲というのは本当に深い人間性をもったひとだね。「敬天」と「愛人」は一つなんだから。バラバラではない。それはヨハネの書簡の中にもそれと同じことを書いてある。

ヨハネ伝やヨハネの書簡を南洲は読んだのではないかと思うくらいだ。中江藤樹（1608～1648）や佐藤一斎（1772～1859）なんかを読むと、キリスト教を知っていたのかと思うくらいだ。「キリスト教」ではない「キリスト道」です。